

## 住まいに関する研究会 活動報告

平成 22 年度第 1 回自立支援協議会において、さまざまな住居に関する問題が挙げられたことで、まず調査や情報収集を始めていくという「研究課題」として、相談支援事業所連絡会が核となり、住まいの課題に取り組んできた。

今年度は講演会への参加と話し合いを行った

## 1、構成員

向（中部大学）、可児（特定非営利活動法人で・ら・しえん）、田代（圏域アドバイザー）  
戸田（肢体不自由児・者父母の会）、尾崎（春日苑）、永井（かすがい）、服部（あっとわん）、  
宮原（JHNまある）

## 2、開催日時・内容

平成 24 年 6 月 27 日 15:20~16:50	講演会「障がい者と健常者が一緒に暮らす共同体『ラルシュ』で暮らした 2 年半 -新しい家族の創造-」に参加
平成 24 年 9 月 11 日 9:15~11:30	地域での暮らしに向けて、宿泊体験の検討 既存の建物やアパートの活用 中部大学との連携 地域生活のリーフレットの作成

## 3、講演会の詳細

## 1) 概要

1964 年にフランスで共に暮らし、共に働き、共に祈ることを理念とし、生きていて幸せと感じる場として形成された共同体「ラルシュ」。そこでは障がい者と健常者が共に暮らしている。午前はアトリエと呼ばれる作業所に通い、昼食後はレクリエーションなどのお楽しみの時間となっている。人と関わることを喜べる環境と時間を作ることが大切だと話される。

日本でも静岡県にラルシュのメンバーで「かなの家」ができる。

## 2) ラルシュから学んだこと

障がいのある方が中心になり、自分自身の弱い部分や悪い部分も含めて自分らしく生きていけるようにすることが大切である。援助する人と援助される人は環境によって変わるため、皆で協力することを忘れないようにする。専門家は前に出るのではなく、障がいのある人を支えるように関わらなければいけない。

## 3) 日本で実施する場合

国や文化が異なるため、フランスでの行いと全く同じにはできない。まずは目的・理念を明確にする必要がある。地域性や個室、集まる場を作るときも考慮しなければいけない。

## 4、話し合いの詳細

## 1) 地域での暮らしについて

## (1) 宿泊体験について

地域での暮らしを目指して宿泊体験を行っている所がある。スタッフの配置が難しく、今は、あまり実施することができていない。支援者の確保として学生や一般の方も視野に入れて検討してみる。

## (2) イメージしやすい資料の作成

障がいのある方が親元を離れて暮らすことについて、本人や家族がイメージできず、不安を感じることもある。中部大学の学生にも協力してもらい、地域で暮らすこと（一人暮らし、ルームシェア、GH 等）のイメージしやすい資料作りを検討する。